

特集

星降る中部高地の縄文世界

—— 葦崎で日本遺産に触れる ——

2018年5月、山梨県・長野県の両県にまたがる縄文時代の遺跡や出土品が日本遺産に認定されました。その中には、葦崎市から発見された縄文人の息吹の伝わってくる土器や土偶なども構成文化財として、『星降る中部高地の縄文世界』のストーリーに組み込まれています。身近にある縄文世界を体感してみませんか。

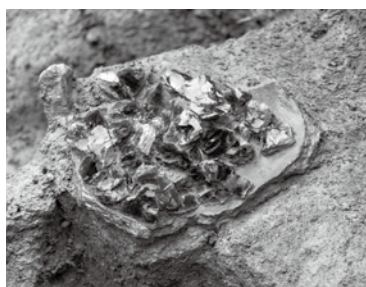
（日本遺産とは）

地域の歴史的魅力や特色から生み出されたストーリーを地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信しつつ、地域の活性化を図ることを目的につくられたものです。

数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅

山梨県と長野県にまたがる八ヶ岳の北麓には本州最大の黒曜石原産地遺跡があります。黒く輝く黒曜石は、石器を製作する代表的な材料として利用されてきました。黒曜石は星叢峠、星ヶ塔、星ヶ台など星の名がつく高原地帯で数多く発見されています。足元でキラキラ光る黒曜石のかげらを、地元の人たちが空から降ってきた星のかげらと信じたことからこうした地名が生まれたと伝えられています。

掘り出された黒曜石は、各地の縄文人の住むムラへと運ばれ、大切に利用されました。黒曜石が運ばれることで、縄文人同士の出会いの場となり、交流のネットワークが結ばれていきました。



▲縄文人のしまった黒曜石のカケラ
（穂坂町女夫石遺跡）



このロゴマークは星空の広がる八ヶ岳、その星空の中央には星のカケラ「黒曜石」で作られた矢じり、八ヶ岳の麓の縄文人たちが好んだ文様をあしらいました。



縄文ムラには竪穴住居が立ち並び、ムラでの生活の中では土偶を用いた祈りが捧げられてきました。土器に付けられた動物や人の顔のような文様は、文字をもたない縄文人が伝えたかった彼らの世界観を物語っています。

中部高地には豊かな自然が変わずに残されており、今もその自然とともに人びとが生活しています。縄文人が黒曜石を運んだ道をたどり、山麓にある縄文のムラの跡を訪ね、そこからの景観を望み、彼らの作った土器や土偶などに触れることで、雄大な自然とともに生きた縄文人の息遣いを感じることができそうです。

胸の奥底にしまわれて忘れ去られた遠い記憶や自然とともにあった日本文化の源流にタイムスリップしてみよう。

日本遺産に認定された葦崎の縄文世界

日本遺産の一翼を担う葦崎からは、鳳凰三山などの秀麗な山々を望め、七里岩台地をはじめとして太古からの景観が色濃く残っています。太古から現在まで続く魅惑的な大地を舞台にして縄文ムラが営まれていました。そこにはもちろん黒曜石が運ばれ、表現力豊かな縄文土器や命を宿した姿である土偶が作られ、誕生と成長への祈りが捧げられていました。それらに触れることで、縄文人の世界に思いを馳せることができるとともに、その世界観が現在に通じていることを実感することができます。

土偶と日没シヨ

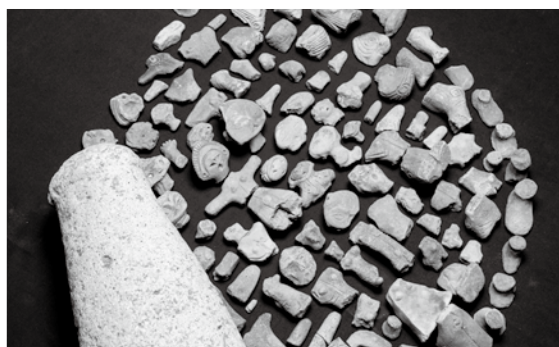
穂坂の女夫石遺跡^{めおとし}では大地から突き出た巨大な岩の周りで土偶を使ったお祭りをしていました。春分と秋分の日に地蔵ヶ岳の巨岩に太陽が落ちるといふ日没シヨを見

ることができず。縄文人は太陽の動きや月の満ち欠けに対して何か特別な思いを持っていたと想定される遺跡が女夫石遺跡以外にも発見されています。再生の象徴である日没、それが一年の中で特別な日に、



▲地蔵ヶ岳の春分秋分の日の日没シヨ

象徴的な山の頂に落ちる風景と命を宿した姿の土偶が大量に出土したことは、偶然という一言で片づけるべきでなく縄文人の「いのち」に対する畏敬の念を読み取るべきでしょう。



▲女夫石遺跡から出土した大量の土偶

土偶グランプリ 第2位のミス石之坪

「スベスベのお肌で、とってもきれいでカワイイ」この土偶を見学した方が発した言葉です。そのとおり、美土偶グランプリで全国第2位を勝ち取った土偶なのです。しかし、魅力は見た目の美しさだけではありません。この土偶は貯蔵穴の底から食料加工具といわれている石器とともに埋められていました。「いのち」をつむぐ食料を貯蔵する穴・食料加工具と「いのち」を宿した土偶を、縄文人はどんな思いをこめて埋めたのでしょうか。



▲美土偶(円野町石之坪遺跡)

盛り過ぎの縄文土器たち

縄文土器を見るとゴテゴテして使い勝手が悪そうだと感じませんか。しかし、そこに縄文人の世界観が詰まっ

ています。ヘビ、イノシシ、フクロウ、さらには得体のしれない抽象化された文様は機能面からは無用の長物ですが、縄文人はそこに力をこめています。合理性の追求とは違う大切なものが存在したことを伝えてくれています。



▲フクロウ文様(女夫石遺跡)

「星降る中部高地の縄文世界」の主役は?

世界遺産や指定文化財が保存に重点が置かれていることと対して、日本遺産は活用に重きが置かれています。楽しみながら自由な発想で活用することが求められています。そうすることで、葦崎をはじめとする「星降る中部高地の縄文世界」がさらに輝きを増すはずです。日本遺産となつた素材で活用への取り組みをしてみませんか?

▶三角頭のヘビ文様(石之坪遺跡)

② 葦崎の縄文世界にハマった人たち ②

「縄文にハマる人々」という映画が全国ロードショーされましたが、葦崎市にも縄文世界にハマった方々がいます。その中の2人を紹介します。



志村 滝蔵

全国的にも有名な坂井遺跡の発掘調査を行い、坂井考古館という博物館を建設した人物です。山梨県における考古学研究の先駆けとなった方です。家業の養蚕に精を出しながら坂井遺跡の発掘に取り組みました。仕事と学問の両立を一流のレベルで成し遂げた点では生涯学習の先駆者ともいえます。

滝蔵の作った考古館はいまなお輝きを失うことなく、次世代に受け継がれています。



▲坂井遺跡で発掘する志村滝蔵



三枝 善衛

東京国立博物館に収蔵されている穂坂の飯米場遺跡の出土品は、その調査に深く関わった三枝善衛にゆかりの深いものばかりです。中でも顔面把手と呼ばれている土器の縁に付けられた顔は、愛嬌があり、「芸術は爆発だ」や太陽の塔の制作者として著名な岡本太郎が自ら写真を撮影した一つとして有名です。昨年、東京国立博物館で開催された『縄文 一万年の美の鼓動』でも展示され、様々なグッズが作られました。

善衛がハマったからこそ、私たちは飯米場遺跡の縄文世界の美を目にすることができるといっても過言ではありません。

葦崎市制施行65周年記念事業「いのち～絵画と原始造形的美～」



星降る中部高地の縄文人たちは「いのち」の躍動を表現した母なる土偶や森に潜む動物や精霊をモチーフとする造形の優れた原始美術を作り上げてきました。それから約5000年の月日が流れた現代においても「いのち」に対する思いは現代美術の中で表現されています。

縄文の美と現代の美から、今一度「いのち」とは何かを共に考えるきっかけになればという思いから、葦崎大村美術館で企画展を開催します。

■開催期間 9月1日(日)～12月1日(日)

■開催時間 10時～18時
(入館は閉館30分前まで)

※11月からは17時閉館

※初日の9月1日は13時開館

葦崎大村美術館で体感する縄文時代と現代の「いのち」

■休館日 毎週水曜日

■入館料 一般 500円
小中高生 200円

※市内に在住・在学の小中高生は無料

※障害者手帳をご持参の方は本人と介助者1名無料

葦崎の縄文文化を
体感できるイベント予定

●ギャラリートーク

(9月1日、10月26日)

・葦崎大村美術館

●親子ふれあい教室体験

(9月14日・螢雪寮)

●ナイトミュージアム

(9月21日・葦崎大村美術館)

●縄文FES

「山梨縄文まつり」

(10月27日)

・甲府よつちやばれ広場

●にら歩歩クラブ

縄文風子ども手形

(11月6日)

・葦崎民俗資料館

●生涯学習フェスタ

「縄文土器作り作品展」

(11月9日、10日・東京エレクトロン葦崎文化ホール)

●問い合わせ

教育課文化財担当

(内線269・270)